成長は成長でも？
――文学教材「とんかつ」の解釈――

矢本浩司

はじめに

国語の教科書に採られている教材については、現場の教師による長年の指導と研究の蓄積によって、指導内容が確定しており、誰が教えても、抜かりなく、システマチックに必要な指導ができるという一面がある。だが、別の一面から見れば、指導内容が些か紋切り型となり、現場の教師がマンネリズムに陥っているキライがある。現に、定番の文学教材の取り扱いに新鮮味や面白味を見出せず、モチベーションが上がりにくいという現場の教師の声を耳にもする。教材を取り扱う教師の志気は、教室における生徒の学習意欲にも大なり小なり連動するだろう。もちろん、国語の文学教材は、一定の文学的達成があるからこそ、文学教材として教科書に採録されているのであり、本稿でも、そうした文学的達成（の全て）に対して異論を掲げるつもりはない。狙いは、教育現場で指導のマンネリ化が生じている文学教材に、従来の解釈とは異なる解釈の視点を導入することで、できるだけ文学教材を現代に開き、それによって、教師の指導意欲と生徒の学習意欲を高めることにある。具体的には、近年、高等学校『国語総合』で広く採用され、新しい定番の文学教材として定着しつつある三浦哲郎の短篇小説「とんかつ」[注1]を取り上げ、やや刺激的な一石を投じることで、文学教育の活性化への一助としたい。

二〇一四年度以降においても、「とんかつ」は、東京書籍、第一学習社、大修館の三社の教科書に掲載されているが、この三社による教科書シェア率は全体の五〇％を超える。「とんかつ」は、どの社の教科書においても、高校生として最初に学ぶ小説の一つとして配置されており、多くの国語教師が、「とんかつ」から小説の授業をスタートさせていることだろう。「とんかつ」は、現代の多くの高校生が入学して最初に目にする現代日本の小説の代表であり、文学教材である。それ故に、「とんかつ」の授業は、教師と生徒との間で成立する高校三年間の国語教育の先行きを占

う極めて重要な機会となる。そこで、文学教育の活性化のためには、まず「とんかつ」を分析しておくことに、大きな意味がある。実際にも、小説「とんかつ」は、広い角度からの分析に耐える確かな強度を持つ「テクスト」である。

一

教室では、「とんかつ」を単なる母子の愛情佳話としてやっつけてはならない。先にも書いたが、「とんかつ」は高校生が最初に目にする現代小説である。この先の文学教育のためにも、ある程度きっちりとした小説の読み方（楽しみ方）を提示しなければならない。そのために、まず次の三つのベクトルからこの小説を読んでみたい。

一つ目のベクトルは、これから高校生が小説を読んでいくにあたって、その読み方の初歩として、小説には、作者と、小説に書かれている内容との間に、内容を語る「語り手」（あるいは、語り手という登場人物）が介在することを教える方向である。「とんかつ」の場合では、旅館を訪れた母子に接したときのコメントとして、地の文に「あまり旅慣れている人とも思えないが、どうしたのだろう」、「ぎくりとした」、「尋ねないではいられなかった」、「他人事ながらはらはらして」などとあることから、語り手は、おそらく旅館の女将だろうと推察できる。これに対して、「これまでいちばん厚いとんかつをじっくりと揚げて出した」と地の文にあることから、語り手は女将ではなく、旅館の板前だと推定することもできるが、この推定については、母親が二度目に旅館を訪れた際に、母親はもう一度とんかつを所望し、それを受けた語り手が「わかりました。お任せください」と応えたあとの地の文に、「引き下がって、女中にとんかつの用意を言いつけた」とあることから、語り手が自らとんかつを揚げているのではなくて、指示して揚げさせていることがわかる。したがって、「これまでいちばん厚いとんかつをじっくりと揚げて出した」という地の文は、女将が指示することで、（板前等が）間接的に揚げて出したとする解釈が穏当となる。教室では、小説で大切な機能を果たす、こうした語りの在り方を押さえる必要があるだろう。

二つ目のベクトルは、主人公について考える方向である。まず上述の語りの分析を前提として、小説を丹念に読みながら、語り手（女将）の気持ちの変化を捕捉していく。具体的には、地の文から語り手の気持ちや思いが表れているところを抜き出して並べていくことになる。すると、語り手の心境が、「あまり旅慣れている人とも見えないが、どうしたのだろう」と思い（不審）、続いて（自殺の名所としても知られる東尋坊等もある土地なので）親子心中ではないかと疑い（疑惑）、息子が頭を丸めたので「思わず、あ、と驚きの声を漏らしてしま」い（驚嘆）、息子が雲水になる経緯を母親から聞いて「謎が一度に解け」（理解）、「これ

までいちばん厚いとんかつをじっくりと揚げて出し」（愛情）、翌年また母親が訪れたので、「一度顔を見ずにはいられなくなったのだろう」と思い（憶測）、現れた息子の「凛とした僧」の姿に「びっくり」する（感服）、というふうに移ろうことがわかる。その移ろいをストーリーと呼応させながら、不審→疑惑→驚嘆→理解→愛情→憶測→感服という女将の反応や心情の変化の過程を丹念に追うことで、小説を精緻に読む訓練を高校生に促していく。その上で、語り手（女将）の気持ちや理解が刻々と変化するところに着目して、「とんかつ」は、「女将の不審や疑惑が、理解と感服に変化する物語」だと捉える。

では、このような語り手が存在する「とんかつ」という小説の主人公は、誰であろうか。小説という文学ジャンルが、主人公の内面や心情を描くことに比較的ウエイトを置くものと捉えるなら、母親でも雲水の息子でもなく、主人公は語り手である女将だと言ってもかまわないのではないか。こうした疑問を生徒に投げかけることで、小説においては、語りの問題が重要だということを認識させる。ここで、さらに日本近代文学の起源に遡り、小説という訳語を生んで、日本に小説を紹介した坪内逍遥が『小説神髄』[注2]で「小説の主脳は人情なり。世態風俗これに次ぐ」と言ったことや、それを受けた二葉亭四迷が「小説総論」[注3]で「凡そ形（フホーム）あれば茲に意（アイデア）あり」、「されど其持前の上よりいわば意こそ大切なれ。意は内に在ればこそ外に形われもするなれば、形なくとも尚在りなん」と述べたことなどを紹介して、近代文学にとっては、内面や心情（坪内逍遥の「人情」や二葉亭四迷の「意」）が重視されることを指摘しておいてもよい。

三つ目は、高校生が生きる現在に接続する重要なベクトルである。節を改めて、少し詳しく触れておこう。

二

三つ目として、一五歳で入山した少年が、わずか一年ほどの間に見違えるように凛とした僧となったことから、「とんかつ」は、少年直太郎の成長譚だというベクトルを押さえておかなければならない。このことを考える補助線として、「通過儀礼」[注4]の概念（制度）が有効だろう。

「青白い顔の、ひょろりとした、ひよわそうな少年」で、「はにかみ笑いを浮かべながらぺこりと頭を下げた」直太郎が、わずか一年で「見違えるような凛とした僧」へ急成長するが、授業では、成長の証しとして、（しばしば苦痛・苦役を伴う）象徴的な儀式や修行や体験などがあって、それを民族学の専門用語で「通過儀礼」（イニシエーション）という前提を説明する。短時間で終わる「通過儀礼」もあれば、長い旅に出なければ果たせない時間のかかる「通過儀礼」もあること、かつて世界のあちこちで行われた「通過儀礼」、たとえば刺青や割礼や抜歯や猛獣退治などでは、痛みに耐え、「勇気」を持つことが成長を認知させる（大

人の）条件の一つであり、加工前の肉体に戻れないということが、成長以前（子ども）に戻ることができない覚悟をあらわしていること、現代社会では、もちろん肉体を傷つけるような危険な「通過儀礼」はできないが、たとえば、成人式、受験、就職活動、卒業式、結婚式、出産、初任給などの人生における節目のイベントが、成長前の子どもの時間と成長を遂げた大人の時間とを区切る象徴的な「通過儀礼」として機能していること、こうしたことを説明しておく必要がある。

「とんかつ」においては、青森県から遠く離れた北陸の古刹へ入門して、五年間も家族と会わずに厳しい修行を受けることと、合わせて剃髪という「肉体加工」を施すことが、直太郎の「通過儀礼」となる。まだ修行前であっても、剃髪直後の直太郎は、それまで「はにかみ笑いを浮かべ」ていたのが、「にこりともせずにうつむいて」、「しかたがないというふうに青い頭を左右に振って」いる。はにかみ笑いが消え、「しかたない」と腹を括るように語り手（及び語り手の目を通して読者）に見えるのは、成長への一歩が既に直太郎に見受けられるからである。

日本近代文学は、しばしば「通過儀礼」を描いてきた。たとえば、谷崎潤一郎の処女作「刺青」[注5]では、刺青師が蜘蛛の刺青を少女の背中に入れるが、刺青が彫り上がったとき、これを機として、少女が妖艶な女に変身を遂げ、刺青師と女の立場（支配関係）が逆転する。「刺青」では、（妖艶な）大人の女性になる（成長を遂げる）ための「通過儀礼」が「刺青」だったのである。谷崎の場合では、少女が成長して大人になったということで、女性は性的な欲望の対象として男性から見られることになるが、その一方で、刺青師は成長を遂げた女に性的に呪縛されてしまう。刺青師は、まるで女の背中の蜘蛛が張り巡らせる糸に絡め取られた餌食のようだと暗喩的に読むことができる。また、谷崎の「刺青」と同様に、刺青による通過儀礼（成長）が転機となり、男女の支配・被支配の関係が逆転する小説として、比較的近年に話題となった金原ひとみ「蛇にピアス」[注6]が想起できる。「蛇にピアス」で、ヒロインのルイが施す「肉体加工」（舌に二股の切れ目を入れるスプリット・タン、背中に彫る麒麟と龍の刺青）も、一種の成長への「通過儀礼」として捉えることができる。ルイが、アマを殺害したシバと共生することを決意できたのは、彫りあがった背中の刺青に、ずっと躊躇して入れなかった「眼」の刺青を入れることができた（刺青が完成した）時と呼応している。

遡って、子どもたちが活躍する樋口一葉「たけくらべ」[注7]をみてみよう。「たけくらべ」は、横町と表町の子どもたちの対立を背景にした美登利と信如の淡い恋の話である。勝ち気だった美登利が、ある日突然大人しくなることについて、美登利が初潮（あるいは初見世）を迎えたから大人しくなったことが先行研究で指摘されている。[注8]初潮（初見世）は、美登利が子どもから大人の女性に変身したことを示すしるしである。初潮はすべての女性が経験

する自然な「通過儀礼」だとも言えようが、「たけくらべ」の美登利の場合は深刻である。なぜなら、（「通過儀礼」としての初潮によって）大人になった美登利は、然る後に店へ出て男性客の相手をすることになるからである。

谷崎でも、金原ひとみでも、一葉でも、少女が「通過儀礼」を経て大人に成長することで、彼女たちは男性の性的な欲望の対象となった。ただ、「刺青」の女と刺青師との関係や「蛇にピアス」のルイとシバとの関係とは彩りをやや異にして、吉原の妓楼（遊郭）の養女である「たけくらべ」の美登利に、彼女が密かに好いていた信如と思いを遂げる筋書きは存在しようがない。一方で、龍華寺の跡取り息子である信如は、俗世を離れて仏門へ入るが、このことは、信如にとっての「通過儀礼」となる。やがて僧侶となる信如が美登利の店へ出向くこともあり得まい。「通過儀礼」を果たした美登利と信如は、二度と「子供の時間」[注⑩]に戻れないばかりでなく、この後、ふたりは別れ別れの道を進むことが予想されるので、「たけくらべ」は、悲恋の「通過儀礼」を描いた小説だと言うことができる。このような、樋口一葉「たけくらべ」の美登利と信如や、谷崎潤一郎「刺青」の少女、金原ひとみ「蛇にピアス」のルイなどは、「とんかつ」において信如と同じく仏門に入る一五歳の少年直太郎にとって、同じ直線上に位置する大先輩（「蛇にピアス」のルイは後輩）であり、翻って、いずれ大人になる教室の高校生たちにとっても、同様に自分たちの先輩として紹介できるのである。

教室の高校一年生たちに、「とんかつ」の直太郎を同い年の身近な存在としてイメージさせ、直太郎の精神性や気構えが中学を卒業して間もない生徒とどれほど隔たっているか、あるいは隔たっていないのかを考えさせることは、高校生が自分の成長の速度や度合いを客観的に推し量る上でも意味があることである。いわば、「とんかつ」の直太郎は、高校生たちが成長を見計る定点観測装置として機能し続けるわけで、そう考えると、「とんかつ」は、心温まる母子の睦まじい愛情を描いた小篇というには留まらず、読者である一五歳の高校生に迫って、「成長」を要請する挑発的な小説に様変わりする。

「とんかつ」の直太郎が直面した（父親が亡くなって寺の後継者とならざるを得ない）ような、子どもでいることができない事況が身の上にひとたび到来すれば、否応なく人は急いで成長しなければならないし、わが身にいつそうした事況が到来するやも知れない。「とんかつ」は、不測の事態を想定した緊迫感や覚悟を持つことを高校生へ迫る、強い圧力を持つ小説でもある。その意味で、入学して間もなく、まだ中学生の雰囲気やあどけなさを残す生徒に読ませる小説として、この短篇は格好の文学教材なのである。

もちろん、「とんかつ」は母子の愛情佳話であるが、決してそれだけではない。これまでに示した3方向のベクトルから「とん

かつ」を読めば、教室の生徒へ向けて、文学の読み方（楽しみ方）の一端と文学が持つ凄味を示すことができるだろう。「文学」教材としての「とんかつ」の面目躍如は、ここにこそある。

三

これまでに示した3つのベクトルについては、あるいは現場の個々の教師の工夫によって、大なり小なり触れられてもいよう。そこで、さらに一歩踏み込んだ異なる角度から「とんかつ」に一考を加えたい。

「とんかつ」が直太郎の成長譚であることは先に書いた。しかし、その成長は、語り手（女将）が直太郎から読み取る印象によって判断したものに過ぎず、読者（である教師も生徒も）は、語り手の眼差し（主観）を通して、それを知っているに過ぎない。たとえば、「しかたない」とか「凛とした」などの地の文の記述は、畢竟、語り手が恣意的に感じ取った印象を述べているだけであり、実際に直太郎がどのような成長を遂げたのか（あるいは遂げなかったのか）について、読者は、どうしても語り手のレンズを通してしか知ることができない。別の言い方をすれば、読者は、直太郎の成長度合いについては、語り手のリテラシー（読解力）に委ねることでしか、把握することができない。語り手のリテラシーはどこまで信頼できるのか。旅館をきりもりする女将である語り手の才覚は、リテラシーと相関があるのか。わけありの母子を見つめるときの語り手にバイアスはなかったのか。語り手の信頼性は、いったい何によって担保できるのか。こうして考えてみると、読者は読み方を制約された不自由な存在である。

剃髪から雲水の修行という「通過儀礼」を経たからと言って、一定の成長があったと考えて本当に間違いないのだろうか。ここまで怪しむのは、語り手の眼が、旅館へ訪れた母子について、初見では心中親子ではないかと疑ったからである。さらに言えば、一年後に母親が旅館に来たときも、語り手が、母親が息子に会いたくなったから自らに課した禁（五年間息子に会わない）を破ったのだと憶測したからである。語り手のいずれの判断も間違っていたわけであり、語り手の判断力は、甚だ当てにならないと言わざるを得ない。

語り手の眼があまり信用できないとなれば、読みの確実性を担保するために、文学作品（テクスト）の外から根拠を引っ張ってくるしかあるまい。

たとえば、テクストには、直太郎が「曹洞宗の名高い古刹」へ入門すると記されている。「近くに東尋坊もあるし、越前岬も…」や「大本山に入門する」などの記述から、「曹洞宗の名高い古刹」が福井県にある曹洞宗大本山永平寺（注⑩）を指すことがわかる。なぜ、小説の舞台は永平寺に特定されているのか。

永平寺を開山したのは道元なので、曹洞宗の開祖道元禅師と雲水となった直太郎とをひとまず比較してみよう。道元は八歳で母

親を亡くし、一四歳で出家して比叡山の延暦寺へ入る。一方の直太郎は、「おととしの暮れに父親を亡くした」とあることから、一三歳のときに父親が他界し、一五歳で出家して永平寺へ入ったと計算できる。年少のうちに親を亡くし、仏門（永平寺）に入るという道元と直太郎の成り行きは、とてもよく似ているので、後の直太郎は、道元禅師のような名高い僧侶に成長する可能性が秘められていると（語り手の眼差しを補強）して想像することができる。

しかし、私見では、もっと異なる（語り手の眼差しを補強できない）方向に成長していく可能性も考えられてならない。それがどういう可能性かを説明するために、テクストの外部から、オイディプス神話を引っ張ってみよう。仏教の臭いのある現代日本の短篇を読むのにギリシャ神話を持ち出すというのは、距離があって唐突に感じられるかもしれないが、オイディプス神話は世界で最も古い話のひとつであり、その物語と話型は、洋の東西を問わず、古代から現在まで生み出されてきた多くの物語や小説に影響を与え続けている。それは、「とんかつ」にも当てはまると思われる。一見してそうとは見えにくい「とんかつ」の物語は、オイディプスの物語の話型に近接しているのである。

そのオイディプス神話の内容を簡単に確認しておこう。

ラーイオス王とイオカステー妃の間に、オイディプスという息子が生まれるが、神託によって、オイディプスは殺されることになった。しかし、母親のイオカステーはそれを不憫に思い、オイディプスを殺さずに捨てることにした。やがて、隣国で逞しく成長したオイディプスは、実の父親とは知らずに、道を譲るか譲らないかの争いで、ラーイオス王を殺害してしまう。オイディプスは、謎かけで挑むスフィンクスを退治したりした末に、自分の母親とは知らずに未亡人であるイオカステーと結婚し、国王となる。オイディプスとイオカステーとの間には、何人かの子どもが生まれた。そのうち、オイディプスとイオカステーは、オイディプスが殺害したのがラーイオスであることと、自分たちが実の親子であることを知る。その罪の重さにイオカステーは自殺する。オイディプスは自ら失明し、娘のアンティゴネーらと放浪の旅に出る。

以上がオイディプス神話の概要である。

では、この神話と「とんかつ」を比較してみよう。オイディプスと「とんかつ」の直太郎には、幾つかの注目すべき共通点がある。オイディプス神話では、オイディプスの父ラーイオスがオイディプスに殺害された発端は、交通トラブルである。オイディプスもラーイオス王も共に戦車に乗っていて、どちらが道を譲るか譲らないかで口論になるという交通トラブルが、ラーイオス王の死の直接のきっかけである。「とんかつ」では、直太郎の父親

は交通事故で死んでいる。オイディプスはラーイオス王が亡きあと、空席となった王の地位につく。「とんかつ」では、直太郎は、父の亡きあとに空席となった「住職」の地位につくべく修行に励んでいる。加えて言えば、王位も住職も、いずれも共通に権威の象徴である。

オイディプスは、捨てられたときに踝を差し抜かれたことによって、以後、足を患ってしまう。オイディプスの名前には、「足の腫れた」という含意がある。一方の「とんかつ」の直太郎は、青森から北陸へ親元を離れて修行にやられてしまい、その間は母親と面会もできないので、自分の意に反して家庭から放り出された、ある種の「捨てられた」状態にあるとも言える。さらに、直太郎は修行中に足を骨折して入院し、見舞いに来た母親に面会するために旅館へやって来たときも、「右足を少し引きずる」ようにして歩いている。生誕地から遠く離され、足を患い、権威ある地位を目指す。直太郎とオイディプスとには、相当の共通点が見受けられる。

オイディプスは実母イオカステーと結婚するが、直太郎が父の跡を継いで寺の住職になる（あるいは、見舞いに来た母親と面会する場所として自ら指示した旅館の二階の一室へ直太郎が立ち入る）というのは、象徴的には父王の座につくことと同義であり、ひとりで寺を守っていた母親と同等の立場となる、あるいは母親より上位の立場になることを意味する。このことは、象徴的には、父の代理であり、かつ母親の夫の代理となることも意味するわけで、直太郎は、象徴的に母親と結婚するということになる。母親が待つ旅館の二階を訪れるときに直太郎が発した「練れた太声」も、父の座に就くことが可能となった成長の証左である。

では、これらのことから、「とんかつ」がオイディプス神話を緩やかに踏襲する展開を示すと言えるとすれば、「とんかつ」の母子の将来は、どうなると予想できるか。現在修行途次の直太郎は、どのように成長しつつあると推測することができるだろうか。

語り手は、立派な僧になる直太郎の印象を綴っているが、「エディプスコンプレックス」(注9)から開放されている直太郎が、母子の間の禁忌を破るべく（象徴的に父の座につくべく）悠然と旅館の二階へ昇っている、そんな風に仮定するとどうだろうか。そのように仮定すれば、「とんかつ」の母子には、あまり幸せな未来はやって来ないかも知れない。オイディプス神話では、禁忌を犯したことを苦にして実母イオカステーは自殺したし、オイディプス自身も自ら失明して長い放浪の旅へ出る。「とんかつ」に後日譚があれば、あるいは、母親のはるよはイオカステーのようにこの世を去り、オイディプスのように目を患い、まるで弱法師のような僧となった直太郎が諸国を当て所なく放浪する、そんな未来が考えられまいか。

道元禅師とも重ねられて将来有望と見える雲水の直太郎が、象

徴的とはいえ、母親と結婚するような方向、タブー（禁忌）を犯す方向に成長すると読むのは、あるいは深読みなのかもしれない。しかし、雲水となった直太郎は、とんかつを食べるために旅館の二階へ昇って行く。修行中の雲水がとんかつ（肉）を食べるのは、厳密に言えば、仏教の戒律を破る破戒僧の第一歩であろう。僧侶が肉を食べてよいかについて、「とんかつ」本文の作中でも語り手と母親が話題にしているが、現代の仏教界であっても（直太郎はまして修行の身である）、肉食の推奨はされていまい。また、仏教の八戒[注12]の一つは、昼食以後の食事を禁じているが、雲水になった直太郎が旅館にやって来たのは「夕方六時きっかり」である。直太郎が、母親と面会するのに入院先の病院ではなく旅館を指定したのは、端から曹洞宗の戒めや仏教の八戒を破る前提でいたからかも知れない。旅館の二階では、肉を食べる＝破戒する直太郎の目の前に、母親が（いっしょにとんかつを食べるために）、言わば共犯的に座っているわけである。この母子の共犯的な関係は、象徴的なレベルでオイディプス神話の母子関係と連続するだろう。

母子の愛情佳話として読めば、小説の題である「とんかつ」は愛情のメタファーだが、オイディプスの神話を補助線として引けば、小説の題である「とんかつ」は、禁忌と破戒のメタファーに他なるまい。

四

最後に、「とんかつ」と同じく『国語総合』の教科書に採られている文学教材として、定番中の大定番である芥川龍之介「羅生門」[注13]と比較しておこう。[注14]

芥川龍之介「羅生門」の下人は、老婆と邂逅する前は、面皰（未成長の象徴）を気にしていて、盗人になるか飢え死にするかを決め兼ねて踏ん切りのつかない青年であったが、羅生門の楼の二階で老婆と出会った後は、「きっと、そうか」と言って己の生きる方向を断定し、闇の中へ走り去る。このような下人の豹変を思えば、「羅生門」は下人の「通過儀礼」を描いた小説だと考えることもできるだろう。[注15]

狐狸や盗人が棲み、死体が捨てられていると噂される不気味な羅生門の二階へ昇る途中の下人は、梯子の中段あたりで「猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の様子を窺っていた」とあることからもわかるように、とても恐々として怯えている。「通過儀礼」という観点で見れば、面皰の残る若い下人は、まだ怖れを抱き「勇気」を持たない若者であり、階段の途上では、成長（「勇気」の芽生え）には至っていない（つまり、まだ「通過儀礼」は果たされていない）。羅生門の楼へ昇り切っても、不気味な老婆の言動に、いちいち怒ったり憐れんだりしていて、気持ちが定まっておらず、「通過儀礼」を果たしきったとは断定しが

たい。それでは、下人の「通過儀礼」はどこで完了したかと言えば、そのクライマックスは、老婆の衣服を剥いだところである。か弱い老女の衣服を躊躇なく剥ぐことができたからこそ、彼はそこで晴れて「勇気」を獲得して、この後の人生を（盗人として）生きることができるのである。

主人に暇を出されてからまだ「二、三日」しか経っていない面皰のある若者が、不気味な羅生門の楼の二階へ昇り、老婆の衣服を剝ぎ取るという「通過儀礼」を果たすことで、「勇気」を獲得（＝成長）して、彼は盗人となって生きる覚悟を決めた。物語は下人が行方知れずとなる結末だが、下人の後日譚を予想すれば、「通過儀礼」を完遂した下人が「勇気」を持って、（八戒の一つである）盗みを犯しながら生きている可能性は高い。

一方、同じく「通過儀礼」を果たしている「とんかつ」の直太郎は、「見違えるように凛とした僧」として語り手に印象づけられ、しっかりした挨拶を口にして、母親が居る二階への階段を悠然と昇って行く。母親のいる二階は、羅生門のように不気味な場所ではないが、一年も会っていない母親に会うのに、この少年に急いた様子はなく、むしろ悠然と二階へ昇る。既に雲水として「通過儀礼」を完遂しつつある「とんかつ」の直太郎と、恐る恐る二階へ昇る「通過儀礼」前の「羅生門」の下人。両者の差異は、二階へ昇る挙動に対称的である。[注④]

羅生門の二階（楼）における下人の「通過儀礼」（老婆への「引剥ぎ」）に匹敵する行為が、「とんかつ」の旅館の二階にあるとしたら、それは、とんかつを食べるという行為以外にはあり得ないが、「通過儀礼」としての「羅生門」から短篇「とんかつ」を逆照射しても、直太郎が母親といっしょにとんかつを食べる行為は、禁忌に迫る極めて象徴的な行為だと言うことができよう。

なお、最後に付言しておくが、小説の読み（楽しみ）の可能性を示すことは、文学教育の最大の使命の一つであろう。そのことを確認した上で、「とんかつ」一篇の分析を通して高校生に最も伝えたいことは、小説の読み方は、たった一つの道徳的な読み方に矮小化されるものではないということである。「とんかつ」は、一方では、心温まる母子の愛情佳話として読めて、一方では、象徴的なレベルでのオイディプス神話の踏襲として読める。このように読みの振幅がとても広い小説「とんかつ」は、それだけ豊穣で、かつ強度のあるテクストだと言うことができる。現場の教師には、生徒へ向けて、そのことを第一に伝えてほしい。

了

注

（注①）短篇集『モザイクⅠ　みちづれ』に収録。一九八八年『三浦哲郎自選全集』の月報に発表。本稿では東京書籍『新編国語総合』をテキストとした。

（注②）上下巻。一八八五―一八八六（明治一八―明治一九）年。

（注③）『中央学術雑誌』一八八六（明治一九）年四月。

（注④）アルノルト・ファン・ヘネップ『通過儀礼』（Arnold van Gennep、*Les rites de passage*, Emile Nourry、一九〇九年、翻訳は一九七七年）の概念による。

（注⑤）『新思潮』一九一〇（明治四三）年一一月。

（注⑥）二〇〇三年一一月、集英社刊。綿矢りさ「蹴りたい背中」と同時に芥川賞受賞となり、映画化もされて話題となった。谷崎の「刺青」と同じく、彼女のデビュー作である。

（注⑦）一八九五（明治二八年）から翌年にかけて『文学界』に断続掲載。

（注⑧）初潮説派（前田愛ら）と初店説派（佐多稲子ら）との間で一九八五年頃に論争にもなった。

（注⑨）前田愛「子供たちの時間―樋口一葉「たけくらべ」―」（『展望』一九七五年六月）

（注⑩）吉祥山永平寺。福井県吉田郡永平寺町にある日本曹洞宗の中心寺院。一二四四（寛元二）年、道元により開創。

（注⑪）フロイトが提示した概念で、幼児期において母親を手に入れようと思い、父親に対して強い対抗心を抱く心理的抑圧（母親に対する近親相姦的欲望を含む）のことだが、フロイトは、オイディプス神話からこれをエディプスコンプレックスと名付けた。

（注⑫）八斎戒。五戒（「不殺生戒」、「不偸盗戒」、「不淫戒」、「不妄語戒」、「不飲酒戒」）、と「正午以降は食事をしない」、「歌舞音曲を見たり聞いたりせず、装飾品、化粧・香水など身を飾るものを使用しない」、「天蓋付きで足の高いベッドに寝ない」の三戒を加えたもの。「とんかつ」では、「不殺生戒」（とんかつを食べる）、「正午以降は食事をしない」（夕方六時に旅館を訪れている）が破戒され、象徴的なレベルで、「不淫戒」が破られている。なお、「羅生門」では「不偸盗戒」が破られている。

（注⑬）『帝国文学』一九一五（大正四）年一一月。

（注⑭）授業では、「羅生門」は「とんかつ」より後に扱うことになるが、谷崎や一葉や金原ひとみも含めて、機会をつくって、さまざまな文学作品を並べて、文学を連環的・大系的に見る態度を養うことも、文学教育においては大切であろう。

（注⑮）「（座談会）「羅生門」を読む」（『日本文学』昭和一九八四年八月）で、「羅生門」について三谷邦明氏は、「イニシエーションを文学言語化」したものだと発言している。なお、これに対して、篠崎美生子氏の「下人は、境界的な場で「通過儀礼」を受ける存在としてではなく、逆に老婆に代表される京都の町に対するストレンジャーとして見えてくる」という見解もある（「排除する物語／排除される物語」―もうひとつの「羅生門」―」『国文学研究』一二三）。

（注⑯）前田愛は「二階の下宿」（『展望』一九七八年五月）で、「二階へ通ずる梯子段をのぼって行く文三の後姿を点出した『浮雲』の最期の一句も、その世界全体のありようを私たちにひらいてみせる暗喩であるかのよう」であり、「内側へ内側へととぐろを巻いて狭まって行く暗喩であるかのよう」だとして二葉亭四迷「浮雲」を論じ、二階が重要な意味を持つ田山花袋「蒲団」や尾崎紅葉「多情多恨」にも論及している。私見でも、日本近代文学において、私的に閉じられた二階という空間は、極めて重要な「暗喩」を含む装置として機能していると思われ、おそ

らくこの系譜上にある「とんかつ」の二階と「羅生門」の二階(楼)の「暗喩」を見過ごすことはできない。